

単純に喜んでいいのか……

先日、関東のある国立大学（教育学部）で、2年生から大学院生まで約50名に特別講義を行う機会を得た。

受講学生の感想の中に、以下のようなものが。

「もっと早く阿部さんに会って、話を聞きたかった」。

「教育とは、単に『係わる』ことでなく、『係わり合う』ことであることを始めて理解できた」。

「大学は、学問するところで、学問とは学び、問うこと。問うということは、自らを見つめる（自己を確立する）作業であることを、理解できた」。

等々。

相変わらずの阿部節(?)だけのたわいない話でしたのに、こうした感想をいただけて、話した甲斐があったかなと思っています。

反面、私の短時間での話だけで、こうした感想を寄越す今の教員養成大学の教育の現状に、はたして私が講義のし甲斐があったと単純に喜んでいいことなのかとってしまいました。

（そうだからこそ、教官は私如き者に招いて話す機会を与えて下さり、また、まだまだ私が発信し続ける余地はあるということにもなりそうですが……）。

（2002年11月15日記）